

四万十川

第2部

とおいわかれの日々に
笹山久三



第2部

四万十川

とおいわかれの日々に

笹山久三 sasayama kuzo

河出書房新社

四万十川・第2部

——とおいわかれの日々に

一九八九年六月二十四日 初版発行
一九八九年八月十五日 再版発行

著 者 笹山久三

装 幀 菊地信義

装 画 後藤えみ子

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇一(営業)
四〇四―八六一一(編集)

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1989 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4―309―00576―4

笹山久三(ささやまきゆうぞう)
昭和二十五年、高知県生まれ。高
知県立中村高校西土佐分校卒。
「四万十川―あつよしの夏」で昭
和六十二年度文藝賞を受賞する。
現在、郵便局勤務。

四万十川・第2部——とおいわかれの日に

その昔、津賀の里は泣き村と呼ばれていた。泣く以外に手だてのない不幸がこの村を覆い、人々は魔神と呼ばれていた怪物の為すままに翻弄されて泣き暮らしていたという。

人を襲って人肉を食らったこの魔神の正体については様々な説が語り伝えられているが、何世代もの語り部たちの口を三百余年もかかって伝わって来た伝説は、今はもう物語のような色あいを帯びて原形を留めてはいない。化猫だとも人間だっとも言われるこの魔神は、人を襲って食べた後に誰を襲ったのかわかる印を必ず残して去ったという。タケという人物を食べた後には、タケの体の中で最も特徴的だった鼻を石の上に残していた。人を襲って連れ去っている現場を目撃した村人は、この魔神を「子牛のような黒い生き物だった」と証言したという。この者の証言が魔神と化猫をつなげる唯一の証拠だとされている。だがこれも、後に言う語り

部たちの創作であるのかもしれない。

ちょうどその時代に、打つ手を失つてただ泣き暮らしていたこの村を通り掛かった三人の兄弟がいた。この三兄弟は姓を新玉、名は上から玄武・行武・丹後とそれぞれに名乗ったというが、樹齡何百年だろうか、津賀の里を見下ろす高台にそびえる樅の木もみぎの根元に作られた祠ほこらの前の墓石は、玄武と行武のものとされる二つしか残っていない。魔神を退治した一番末の丹後の墓は、山を遙か隔てた秩の川という所にある。

魔神を追つて山に入つた丹後は四万十川を見下ろしてそそり立つ高雄山たかおさんのふもとの小さな集落にたどり着いた。宿を申し出たところ、その家の主人いわく、「私の家には布団もない。この上の老婆の家なら泊めることもできる……。食べるものは、私が運んで差し上げよう。……それから、朝出掛ける折は必ず私の所に立ち寄つて下さい。今までそのうちに泊まつた旅人は何人もいたが、朝挨拶に寄つた人は一人もいない……」この言葉に不審を抱いた丹後は、刀を抱いたまま寢床に入った。すると夜中に布団に爪をたててそつとはぎ取ろうとした者がある。丹後は、起き上がるなりその者に太刀を浴びせた。額を切り付けられた魔神は、火を噴いて飛びしがり、そのまま山に逃げ込んだという。それからの物語は丹後が魔神を秩の川に追い詰めて庄屋の家で討ち取るところまで続いているが、秩の川での丹後は新玉ではなく、芝丹後として祭られている。庄屋の家の養子になつたというのが、津賀の新玉丹後と秩の川の芝丹後を結ぶ唯一の説明だが、魔神が歌つたとされる「今日は年の晩じゃ丹後さんも来まい。蓑も笠もす

「つこぬけ」という歌も、魔神の伝説も殆ど同じ内容で双方の里に伝わっている。それにもかかわらずこの二つの里は、現在使われている道をたどれば、当時の交通事情では日々をつなげるほど近い距離にはないのである。

里人が文字を知らない時代にも、この伝説は、語り部の口から耳へ、そして口から耳へと歴史の中を伝わって来た。祭りの夜、若者たちは酒を持ち寄って神社に集まった。娯楽の少ない時代、しかも貧しい暮らしの中では、酒を飲みながら聞く語り部の伝説が唯一の楽しみであったのかもしれない。だから、村人にとって伝説の語り部たちは現代の小説家であり、講談師であり、ある意味では茶の間を楽しませる落語家やその創作者ですらあったのだろう。伝説の語り部たちが、その技量を競ったのは、ある時は記憶の確かさにおいてであり、そしてある時は脚色、創作の豊かさにおいてであつたろう。今も、この物語を聞かせる語り部がいるが、その語り口を評してこう言う者がいる。「あの人の話は講談師の話を聞くよりもおもしろい」と……。

こうした事情もあつて、三百余年にわたる聞き伝えの繰り返しの中で伝説はその原形を失つてしまったのかもしれない。長い歴史の中で変転する時代にさらされながら現代に受け継がれた伝説が、その起こりのままに残しているのは、その時代からすでに巨木であつたと推測されている樅の木と、文字すら見えないほどに古びた墓標、それに新玉兄弟が生活保障として庄屋から特別のはからいを受けて耕していた田んぼが武田という地名を付けられて今も耕されている

るぐらいのものなのだろうか。

今は誰も住まなくなつた高雄山のふもとの小さな集落には、石積みの屋敷跡が、そして丹後が魔神を追つて駆け抜けた山々には、丹後のぬた、丹後の滝、丹後の丘という地名が残されている。

すでに物語になつて残っている伝説。この伝説に多くの解釈を加えながら、村人はこの伝説を今も語り継いでいる。ある者は伝説の魔神を強大な力を持った山賊のような者ではないかと推測し、力の強い狂人だつたのではないかとも言ふ。新玉兄弟の身元についても、文字で明らかにされた歴史と対比した多くの推測がある。こうした現代の目にさらされながらも、新玉様の伝説は集落の中に力強く生き続けているのである。

それは、この土地に生き行く人々の生活そのものが築いて来た文化のようなものである。土地と結び付いて、この地に根を下ろして何世代も命を受け継いで来た者たちだけが持つ自分たちの歴史なのである。それは、山や田畑や川と自分たちが受け継いで来た命の一つに溶け合わせることに、今を生きて行く意味を見つめる人々の心そのものであるのかもしれない。

山里の民の生活は、いつもその風土とその歴史に包まれて息づいていた。だが、この里や村も、巨大な時代の流れに逆らうことだけはできなかった。むしろ、山里であるが故に時代から受け取らねばならない悲哀があつた。

父親たちがダムや道路工事などの様々な飯場から戻って、田んぼ仕事の合間（あいま）に山に入り、自分の植えた杉や檜（ひのき）が、雑木や葛（くず）や茅（かや）などとの生存競争に負けないよう、鎌を振るってかわいい苗木たちを支援している間、子供たちはあまり山には入らない。中学生にでもなれば、集落共有の山や自分の家の山で雑林鎌（ざうりんかま）を振るうこともあるが、小さい子供たちにとって、夏の山は危険が多すぎる割りに魅力が少ないからである。

父親たちがハメ（マムシ）や蜂の襲撃を警戒しながら雑木や雑草と格闘を続けている間、子供たちは川に遊んでいる。

父親たちが米の収穫を済ませ、それぞれの飯場に戻って行く頃にもなると山々は子供たちの無限の遊び場になる。

時には冬眠し遅れた間抜けなハメに出くわすこともあるが、秋の山は、多少の危険を冒しても入りたくなるような魅力に満たされていた。特に男の子たちは川漁が終わる頃から山に惹かれ始める。秋山は、椎（しい）の実・アケビ・ここぶ（むぶ）の実・山芋・松茸・かずら梨などが、その入り口から初冬にかけて次々に収穫期を迎えるために、子供たちはこの時期休むことを知ら

ず山に入って行った。

四年生になった篤義は、この日曜日にも山に来ていた。今日で三度めの山芋掘りだ。

「もう、弁当食おうか」篤義のすぐ右側を掘っていたのんびり屋のバクさんが、いかにも疲れたという声を発した。

「何時ごろよ」

「知るかえ。腹へらんか」

「へった、へった。飯食おうぜ！」少し上の方から、一つ年下の太一が待ってましたとばかりに降り始めた。太一は、滑るのを防ぐために長靴の踵かかとを急傾斜の山肌に食い込ませて、小枝につかまりながらゆっくり降りて来た。太一の長靴が山肌に食い込むたびに、踵で押し出された泥が山肌を滑って、足跡の下側に楕円形の小山を残した。その模様からこぼれ出た小石が小さく弾みながら篤義の方に転がって来た。

「だいぶ掘ったか」篤義は太一に笑顔を向けた。

「ほんのオビットぜ」太一はおどけたそぶりで答えたが、その弾みでズルリと滑り、篤義の横に滑り落ちて来た。太一の様子にバクさんが笑い出し、篤義も釣られてケタケタ笑ったが、太一は、その笑いの原因が分からなかったらしくなおもおどけて見せた。本当は太一の鼻の下側に泥がこびりついて白く乾いていたことがおかしかったのだ。

「そんなら、飯にしようか」

三人は、道具をそこに残したまま沢の方に降りて行つた。

弁当を広げた沢は、ほゞ、谷の源流に続いていて、沢と言うよりも谷と言つた方が正確なほどの水量をすでに湛^{たた}えていた。流れの両側には孟宗竹^{もうそう}が茂つて、その柔らかい葉先からこぼれた日の光が沢の瀬に戯れて篤義らをキラキラと照らしていた。太陽を雲が遮れば、少し薄暗くなつた風景の中で、沢は空や周囲に乱れて遊び回る光の子供たちを集めてその全面で淡く柔らかい輝きを放つが、竹の葉先からこぼれた日差しが沢の瀬を強く輝かせると、穏やかな沢の澱^{よど}みは柔らかい光の膜を失い、その水底の様子を包み隠さずさらけ出した。水の流れに逆らつて動く影はもつごだろうか……。篤義は、沢の様子に見とれながら、箸を進めていた。そのうちに、彼の中で「尾根に登つてみたい」という欲望が頭をもたげた。この尾根をたどれば津野川の山に出られる……。そう考えると、無性に尾根が恋しくなつた。

「ねや！」篤義は二人に声をかけた。

「おー？」バクさんの間延びた声と同時に太一が振り向いたのが分かつた。

「山に登ろうぜ。この上」

「なぜぞ？」「なーし？」二人が訝^{いぶか}るような返事をした。

「もう、ここぶの実が熟れちよる。この尾根にやいっぱいあるがぞ。それに、津野川の上までいんだら松茸もある」

「あるかえ、松茸らあ。もうおせ、(大人)にとられてしもちよるけん」

「分からんぞ。こないだもいっぱいあつた。ここぶは間違いないけん」篤義は、二人の気持ちをどうしても松茸とここぶの実に集めたかった。本当は松茸もここぶの実もどうでもよかったのだが……。

「おら、ええがぞ。いま掘りよるが掘ったら一回食う分たつぷりあるけん」まずバクさんがここぶの誘惑に妥協することを宣言した。

「おら、あんまり掘つちよらんがぞ！」太一は、表情を硬くして、話の流れに懸命に逆らおうとした。太一の気持ちの動きは表情だけで分かった。

「何本掘ったがぞ」

「二本……」太一は無然とした口調で、まだ掘っていたという主張に代えた。しゃべった後、口を固く結んだのは表情を変えないようにするためだ。毎日つるんで遊んでいるから篤義には太一の強情っぱりが手に取るように分かる。

「まだ二本かよ……」バクさんは根っからの農民の子供だけに鍬類を使わせれば、上級生はだしの実力を誇っていたし、その力を自分で自覚してもいた。

「しょうがないろ。おら、三年ぞ。まだ……」

「なら、おらが一本掘つちやるけん」

「おらも」篤義の申し出にバクさんも同意した。太一の表情が和んだことで山登りが決定した。太一は、おばあさんと二人で暮らしている。だから、とろろにして食べるならたくさん掘る必

要はない。だが、近くに住んでいる叔父おじの家にも持って行つてやりたいのだ。彼には、なぜかそんなところがあった。

山芋掘りを覚えた子供たちが、この重労働を自分らの遊びの中に位置付けるのには幾つかの訳があった。この遊びで家計を助けられるのが最も大きい理由だが、それだけではない。山の土には匂いがある。松茸のような旨い匂いだ。掘った穴の中から、その土の匂いが漂うと思わず息を深く吸い込みたくなるような衝動しょうどうを覚える。そして、子供たちは山芋掘りの途中、自分の世界の中で芸術家になった。どこでどう曲がっているか分からない山芋に傷を付けないように、その全体を掘り出すことは至難の業だと言つてよい。非力な子供たちがこれを成し遂げるには、自分の行いの一つ一つに全神経を集中しなければならなかった。それは、どんなゲームをしている時よりも遥はるかに充実した時間である。神経の細やかな動きと激しい労働は、その目的に溶けて、いつも彼らの中で創作の喜びに同化されていた。

「てっぺんまで、どればあかかろがぞ」太一が、山芋を背中にはす掛けに背負つて振り返つた。掘つた山芋は木の枝を軸にして、茅の葉で包み、まだ節々のしつかりした芋蔓いもづるでぐるぐる巻きにして持ち帰るのだが、背丈のない太一が、きれいに掘つてもらつた山芋を長いまま持ち帰ることにこだわつたために、背負つた荷物が体に長過ぎてやけにバランスの悪い恰好めづうだ。

「じき着く、まずあの尾根までいっぺんに登るがぞ。そしたら尾根伝いに、あのでっぺんまで

行く。そしたらじきじゃ」

「遠いねや……」太一は、篤義が示した尾根に目をやりながら、もう疲れていた。

「ここぼぞ」

「松茸もぞ」

「アツくんが先に行くがぞ」太一は、篤義とバクさんが自分をからかっているのに気付くと、それに応えて笑顔を見せながら篤義に先頭を譲った。篤義は同年代の友達と山を歩く時には、いつも先頭を歩いた。先頭を歩くと、ハメのことや猪のこと、そして例えば伝説に出て来る魔神の恐怖など、得体の知れない不安に捉えられて首筋から顔の表面にジンジンと弱電流の流れることがあるが、そんな臆病を仲間に悟られるのが厭^{いや}だったし、自分でも、その臆病を認められなかった。

この年代の子供たちの生活空間には、狭いテリトリーのようなものがあつた。その領域は子供らの成長につれて広がり、その分だけ遊び場や子供社会のテリトリーの空気も緩^{ゆる}むが、それは、学校の人間関係とは全く別の、縦横に組織され、大人からも独立した社会であつた。津野川という小さな集落でも、子供社会は概ね三つに分かれて形成され、世代交代の年月の中を動いていた。四年生になつた頃から篤義は、自分らのテリトリーの中でもつぱら太一とつるんで遊んでいた。バクさんは、学校を挟んだ別の縄張りの同級生だったが、性格が似ているせいか、最近では境界線を越えて篤義と行き来するようになっていた。

「まだかよ……」灌木かんぼくの茂みを避けて、杉林の尾根にたどり着いた時、太一が、後ろの方で悲鳴のような声を上げた。もう歩けないことをアピールしているのが、その声音で伝わって来た。つらそうな声に寄り添っている激しい息切れが、アピールに逆らいようない説得力を付け加えていた。

「休もうか」篤義は、山嶽やまぐわを下ろして振り返った。登る時には目の前だけしか見ていなかったが、見下ろせばいま歩いて来た斜面は、転がれば、どこまでも転げ落ちそうな急傾斜である。休むという言葉に安心したのか、その斜面を一步步確かめるように登って来る太一の上気した顔に安堵あんどの笑みが浮かんでいた。切らせる息の激しさは篤義もバクさんも太一と同じだった。朝家を出る時は肌寒いぐらいの陽気だったが、今は、下着がぐっしり濡れて、全身がほてっていた。

「ここぶ、まっことあるが」太一は、先の二人に追い付くと、その場に用心深く座り込んで篤義を見上げた。

「分かんよ、それは……」

「じゃ、嘘言うたがぞ」

「嘘じゃあないぞ」

「まことじゃないぞ」

「嘘じゃあないぞ、まことじゃないぞ、そんなら何ぞ」篤義とバクさんの言葉遊びを太一がま

ぜ返した。

「兄ちゃんに聞いたことがあるがよ。アケビは谷の方にいっぱいあるけど、ここぶは山の尾根の方にいっぱいあるがと」

「なかったら、何くれる？」

「そうじゃねや。かずら梨のあるところ教えちやる」

「おら、知つちよるもん。椎の実拾いに行くところじゃろ」

「違う。もつと近いところじゃ」

「どこ？」

「今は教えん」

「けちんぼ」

「けちんぼは、おせ（大人）のチンポぞ」黙って聞いていたバクさんが話をまぜ返して、二人を笑わせようとした。

「文句言わんで、ついて来たら教えちやる」篤義は、もしここぶの実がなかった時の代償は払わなければならぬと思つてはいた。この山登りは、自分の気まぐれをあとの二人に押し付けたものだったからだ。それに、かずら梨のある所は、この秋に見付けたばかりだが、太一やバクさんに隠し通す必要は何もない。誰かと一緒に見付けたのなら、その相棒を裏切ることになつてしまうが、その場所は自分だけで見付けたのだ。太一が満足そうに黙つたのを見て、篤義